

じょうこうじ

掟光寺だより

令和3年
11月号

行事案内

●11月7日(日)

「雪囲い・掃除」

8時00分から

●11月8日(月)

「宗祖報恩講」

13時30分から

長寿であればよいか？

昔、中国の唐の時代にある立派なお坊さんがいました。

ある時、このお坊さんのところに、60歳ぐらいの男がやってきて、世間話のついでにお坊さんに聞きました。

「いくら仏教の教えがあったいとはいつても、まさか、人間が80年も90年も生きられるということはできませんよね？」

するとお坊さんは「それは必ずできる、お前さんが80歳まで生きたいと思うなら、来年の今日、もう一度お参りに来なさい。その方法を教えてあげよう」と答えたので、男は喜んで帰っていききました。



お坊さんはそれからの毎日、この男と約束したことなど忘れていきましたが、一年が経ち、約束の日が来たので、あの男がまたやってきました。男はいろいろなお供えを用意し「これは粗末なものです、どうぞ召し上がってください」と差し出すと、お坊さんは「仏さまへの供養ということなら喜んで頂きましょう」と受け取りました。そして、男は「それじゃあ、お坊さま、今日は約束通り、80歳まで生きられる方法を教えてください」と言いました。

お坊さんはそんな約束をしていたなと思いつき、「よしよし教えてあげよう。しかし、お前さんは80歳くらいでいいのか？もっと生きたいとは思わないのか？」と言いました。

すると、男は「そりゃ、生きられるのでしたら、もっと生きたいものでございます」と答えたので、お坊さんは「それでは、100歳はどうだ？」と聞くと、男は「100歳まで叶うのならそう願います」と答えました。

お坊さんは「それでは、もう一年我慢して来年の今日、また来なさい。きつと100歳まで生きる方法を教えてあげよう」と言われて、男は嬉しそうに「100歳まで生きられるのなら、もう1年も2年も待ちます。それでは来年の今日伺いますから、どうかお願いしますね」と言い、その日はこれで帰りました。



それからまた、お坊さんは約束のことも忘れて、悠々自適な毎日を送っており一年が過ぎました。

どうとうその日が来て、男がやってきました。以前のようになり、いろいろなお供えを持ってきましたので、

お坊さんは「これはこれは丁寧な心配り、早速仏さまにお供えしましょう。どうぞゆっくりしていただくさい」と約束のことは忘れていた様子です。

男は件の願いで来たので、早速「お坊さま、今日は約束通り、どうか100歳まで生きる方法を教えてください」と言いますと、お坊さんは思い出したように、「そうであったな。よしよし教えて差し上げるとするか。しかし、お前さん100歳と言っても、お前さんの年からすると、それほど離れていくわけではない。むしろ200歳まで生きることにしてはどうかね」と言いました。



男は「えー、そんなに人間が200歳まで生きられますかね?」と驚いて聞きかえすと、お坊さんは「いや、生きられるとも、私の教えに従えば必ず生きられる」と言いました。

男はそれを聞いて「それはあまり欲の深いようではありませんが、いつそのことそのように願います」と答えました。

お坊さんは「ついては寿命も長くなることであるから、今日というわけにはいかない。来年の今日忘れずにもう一度来なさい」

男は「ええ、もう200歳まで生きられるなら、1年や2年、3年過ぎようとも構いませんが、しかしそれを教わらぬうちは、いつ死ぬとも限りませんから、きつと来年の今日には教えてください」と言って帰りました。



その後、お坊さんは例のごとく、のんびりと過ごしていましたが、翌年の約束の日がきて、男がやってきました。

男は早速「えー、お坊さま、約束の教えを頂きに参りました」と言うので、お坊さんは「よしよし教えてやるとしよう。」

まずお前さんが80年生きようと思つたなら、たとえ明日の晩に死ぬような時でも、その臨終の際にきたら、『あー80年生きたな』と思えばそれでよろしい。

また、お前さんが、100年生きようと思つたなら、いつでも死ぬ時に『あー100年生きたな』と思えばよろしい。

また、お前さんが今日の願ひ通り200年生きたいと思つたならば、『あー200年生きたな』と思えば、それで200年生きたことになるのだ。

何年生きて同じこと、足りない足らないと思えば100年目に死んでも100年の寿命にも劣り、ああよく生きたなと思つて、長生きの欲に迷うことがなければ、たとえ20歳で死んでも200歳の寿命を得たと同じことなんじゃ。この道理が分かるか?」といわれ、

男ははたと膝を打ち「ああ、そうでした。私は迷っていません。それが唯一の長寿法だったんです」と言つて、男は帰っていききました。

あとがき

長寿は素晴らしいことで誰しもが元気で長生きしたいものです。日本人の平均寿命は、男性81歳、女性87歳ぐらいで、健康寿命は男性72歳、女性75歳ぐらいだと言われています。

時代別で平均寿命を見ると、江戸時代は32歳。明治時代は44歳。大正時代は43歳。昭和時代は(戦時中)31歳。(戦後、平均寿命は伸び、昭和22年に50代、昭和46年に70代を超える)

平成時代は83歳。となり、現代は人類史上初の長生き時代を経験しています。

先日、70代半ばで亡くなられた方のお葬儀がありました。その席での弔辞が、「まだこれからの人生をお持ちだったのにも拘わらず」と言われるような時代ですから、なかなかたいへんです。

「長生き」に関するアンケートで、「あなたは長生きしたいですか?」という質問に対し「半

数以上の方が「長生きしたくない」と答えるそうです。

しかしながら、「では、何歳ぐらいで死にたいですか?」と聞くと、60歳ぐらいの方は「70歳くらいかな」と答え、70歳の人は「80歳ぐらい」答えるでしょう。

口では長生きしたくないと言つても、「じゃあ、あなた今すぐ死んでもいいんですね」と聞かれると「いやいやそれは困る。あと5年10年くらい生きたい」というのが本音ではないでしょうか。

また、それから10年経つたあと、また同じ質問を聞くと「いやいやまだ10年くらいは生きたい」と答えるでしょう。

何歳になつてもとにかく死にたくないというのが私たちの本心だと思えます。

このお話はそんな深い私たちに「いのちというのは、物理的な時間の長さではなかったり、年月の多い少ないに左右されるものではない。要は気持ちの持ち方が一番大事である」と私たちに教えています。

